

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 11 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21320138

研究課題名（和文） ユーラシア・ユダヤ現代史の構築

研究課題名（英文） Construction of Modern Eurasian Jewish History

研究代表者

高尾 千津子 (TAKAO CHIZUKO)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：00247264

研究成果の概要（和文）：

本研究はユーラシア・ユダヤ史という新たな枠組みから、ロシア・ソ連と日本との利害が衝突したシベリア、極東、満洲に研究の軸点を置き、ユーラシア諸地域におけるユダヤ人のディアスポラの状況、大戦前後の難民・DP 問題に関する研究を実施した。研究組織は日本、ロシア、イスラエル、アメリカ各地に散在する文書館史料調査とフィールドワークを主体に研究を行い、また 2009 年度、2011 年度に外国人研究者を招聘して公開講演会やワークショップを開催した。

研究成果の概要（英文）：

Based on a new framework of Eurasian Jewish history, we made the research on Jewish Diaspora and refugee/DP questions before and after Holocaust with focus on the Far East and Manchuria where Russia/Soviet Union and Japan had conflicting interests. The research was conducted mainly on archival sources located in Japan, Russia, Israel and the United States. Public lecture meetings and workshops were held in 2009 and 2011 by inviting foreign scholars.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
2010 年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2011 年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
年度			
年度			
総計	14,400,000	4,320,000	18,720,000

研究分野：ロシア史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ハルビン、ユダヤ人、DP 問題、ディアスポラ、ホロコースト

## 1. 研究開始当初の背景

近年の帝政ロシア・ユダヤ史研究の動向は、かつての研究の中心対象であった「ユダヤ人定住区域」からロシア内地やシベリアへと研究の視野が拡大したことである。ロシア史一般と同様、ユダヤ史の分野からもロシア帝国

史の再検討がなされつつあり、19 世紀中葉の大改革期以降のロシアでは、西欧とは別の「ユダヤ人問題」解決の努力が存在し、また従来ロシア革命後と見なされてきたユダヤ人の急速なロシア化プロセスは、帝政期以来の継続的發展であったことが注目されてき

ている。

研究分担者ウルフ・デイビッドが明らかにしたように、帝国辺境にあったハルビンは帝政ロシアのリベラルな顔であり、多くのユダヤ人が引き寄せられた。ユダヤ人の極東ロシアや満洲への進出とともに、20世紀の日露関係の舞台にあらたに登場したユダヤ人というファクターは、ロシア革命と内戦、シベリア出兵を経て日本のユダヤ人認識に大きな影響を与えた。にもかかわらず、日露関係の焦点であったロシア極東、満洲における「ユダヤ人問題」と日本との関わりは、長年の資料的制約も相まってロシア史研究の側からはまったく未解明の状況にあった。

スラブ研究センターの20世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築——中域圏の形勢と地球化」研究、スラブ・ユーラシアにおける跨境史研究も、本研究着想のひとつの契機となった。その研究成果『講座スラブ・ユーラシア学』(全3巻、2008年)には代表者高尾千津子、分担者の小森宏美、中嶋毅が参加した。

以上の経緯から、ロシア・ソ連史研究者と東欧ロシア・ユダヤ史研究者の共同研究を組織し、(1)ユダヤ人をめぐる日露間の歴史と認識の解明ならびに(2)ユダヤ史とロシア・東欧史相互の影響、知的交流を跨境論的アプローチによって分析、検討のために、本研究プロジェクトを組織することとなった。

## 2. 研究の目的

本研究は、ロシア・ソ連と日本との利害が衝突した極東・中国東北地方に着目し、ユーラシアにおけるユダヤ人の跨境的活動という問題領域を開拓することを通して、欧米中心ではなく、我が国独自の視座からの新しいユダヤ現代史像の構築をめざすことを目的とした。具体的には組織を3班に分け、主として以下の三つのアプローチを設定したうえでユーラシアにおけるユダヤ現代史の総合的構築を目指した。

- (1) ロシア革命後のロシア極東および満洲におけるロシア・ユダヤ人の歴史的経験と日本との関わりを解明する
- (2) 第二次世界大戦前後のユダヤ人難民問題をヨーロッパと極東の双方に着目し比較検討する。
- (3) 冷戦期および冷戦終結後のロシア・ユダヤ人ディアスポラの実態を解明する。

## 3. 研究の方法

- (1) 国内外に散在する資料の収集、とくに文書館史料の調査、閲覧、収集、および現地でのインタビューなどのフィールドワークにより未解明であった諸問題を解明する。
- (2) 各年度末に研究報告会を開催し、随時成果を持ち寄り、情報交換を行い、研究成果を

総合する。同時に国内外の第一線の研究者を招き、新知見の吸収と共有に努める。

(3) 組織メンバーは国内外の国際会議やシンポジウムで報告を行い、研究成果を発表する。

## 4. 研究成果

### (1) 文書館史料調査に基づく成果の発表

代表者、研究分担者、連携研究者、研究協力者は、極東ロシア、満洲のユダヤ人問題、戦後世界のDP問題、ロシア系ディアスポラユダヤ人に関する史資料の調査、収集、分析を行った。2009年から2011年までに調査対象となった主な文書館や組織は以下の通りである。アメリカ：スタンフォード大学フーヴァー研究所文書館、YIVO文書館(ニューヨーク)、議会図書館(ワシントンDC)／ロシア：軍事文書館(モスクワ)、外交政策文書館(同)、ホロコースト研究教育センター(同)、ハバロフスク地方国立文書館、／イスラエル：ジョイント文書館(エルサレム)、ヤド・ヴァシェム文書館(同)、国立図書館(同)、中国出身者同盟(テルアビブ)／その他：フィンランド国立図書館スラヴコレクション、エストニア・ユダヤ博物館、チェコ国立図書館附属スラヴ図書館など。

以上の調査にもとづく研究成果は、代表者、分担者らにより後掲の雑誌論文、学会発表、単行書等で発表された。また2012年度中にも刊行が予定されている。

### (2) 研究セミナー、国際会議の主催

2009年12月、極東ロシア・ユダヤ史の第一人者であるロシア国立極東人文大学(ハバロフスク)のヴィクトリア・ロマノヴァ教授を招聘し、「極東のユダヤ人に関するロシアの政策(1860年代～1920年代)」に関する研究セミナーを早稲田大学ロシア研究所、北大スラブ研究センターにて開催した。

第二次大戦前後の極東方面へのユダヤ難民問題は、ロシアと日本の史料の公開、調査、研究協力、さらには歴史認識の共有等、日ロ間の研究交流が最も必要な分野の一つである。2011年度に『ホロコースト百科事典』Холокост на территории СССР: Энциклопедия (Москва, 2011)の編集主幹でありロシア・ホロコースト研究教育センター議長のイリヤ・アルトマン教授をモスクワから招聘し、公開講演会「ソ連領内におけるホロコースト」を主催した。独ソ戦はホロコーストの決定的要因であり、また併合地域を含むソ連領はホロコースト犠牲者の半数を占めるにもかかわらず、戦後ソ連でホロコーストは歴史研究の対象とならなかった。講演は、ソ連崩壊後になって初めて可能になった旧ソ連地域におけるホロコースト研究の現状と新資料を紹介すると同時に、ロシアにおけるホロコースト研究の困難さと諸問題を

明らかにした。その上で、我が国のドイツ現代史、ロシア史、東欧史の研究者とホロコーストをめぐる意見交換を行った。またアルトマン氏を交えて立教大学にて研究会を開催し、いわゆる「杉原ヴィザ」をめぐる日ロ双方の文書館資料について情報交換を行った。ロシア側はアルトマン氏、日本側からは杉原千畝の研究者である外務省外交史料館の白石仁章氏の協力を得て、ロシアのこの問題に関する史料公開の可能性、日本側史料の整理と翻訳等今後の具体的研究方針と方向性が話し合われた。

### (3) 国外での研究成果の発表

代表者、分担者は日本における研究成果の海外発信を目的に、アメリカ、イスラエル、ロシアで報告を行った。また高尾が編集委員をつとめる極東ユダヤ研究シリーズ Mizrek: Jewish Studies in the Far East 第1巻がドイツで発刊され、論文の他、日本におけるユダヤ研究紹介や書評が海外発信された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 12 件)

- ① Takao Chizuko “Russian Jewish Harbin before World War II” *Japanese Slavic and East European Studies*, 査読有, vol.32, 2012, pp.39-53.
- ② 高尾千津子「ユーラシア・ユダヤ史をめぐる断章」『史苑』査読無、72 巻 2 号、2012 年、1-6 頁。
- ③ 小森宏美「体制転換と歴史認識——エストニアのソヴェト化をめぐる複数の語り」『地域研究』査読有、12 巻 1 号、2011 年、234-251 頁。
- ④ 中嶋毅「満洲国白系露人事務局第三課長マトコフスキイ」『セーヴェル』査読無、27 号、2011 年、21-30 頁。
- ⑤ ウルフ・デイビッド「スターリン—国境の男」『国際政治』査読有、162 号、2010 年、24-40 頁。
- ⑥ 赤尾光春「シュテットル再訪—パスポートと軍隊のない『ユダヤ王国』」『ナマール』査読無、15 号、2010 年、2-19 頁。
- ⑦ Wolff, David, “Open Jaw: A Harbin-centered View of the Siberian-Manchurian Intervention, 1917-22”, *Russian History* 査読有、Vol36, No.3, 2009, pp.339-359.
- ⑧ 高尾千津子「ハルビンのユダヤ人と日本」『セーヴェル』査読無、25 号、2009 年 21-26 頁。

〔学会発表〕(計 14 件)

- ① Wolff, David, Stalin and the Redrawing of Soviet Asian Borders, Conference on “L’URSS et la deuxième guerre mondiale”, 2011 年 5 月 5 日、Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales, Paris, France.
- ② 高尾千津子、「戦前ハルビンのユダヤ人」、ロシア・東欧学会、JSSEES 合同研究大会、2010 年 10 月 24 日、天理大学
- ③ 野村真理「ホロコースト後のユダヤ人 DP 問題」2010 年 10 月 9 日、大阪大学 GCOE 「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」主催「シオニズムの解剖」、東京麻布台セミナーハウス。
- ④ 中嶋毅「ハルビンのロシア人組織『白系露人事務局』について」ソ連東欧史研究会、2009 年 9 月 19 日、九州大学。
- ⑤ Takao Chizuko, Japan faces its Jews: Harbin Jewish Community under Japanese Rule, 2009 年 8 月 5 日, the 15<sup>th</sup> World Congress of Jewish Studies, Hebrew University of Jerusalem, Israel.

〔図書〕(計 18 件)

- ① 生田美智子編、高尾千津子、中嶋毅他、成文社、『満洲の中のロシア：境界の流動性と人的ネットワーク』2012 年、299 頁 (67-92 頁、205-219 頁)。
- ② 原暉之編、ウルフ・デイビッド他、北海道大学出版会、『日露戦争とサハリン島』2011 年、450 頁 (1-33、251-280、397-414 頁)
- ③ 赤尾光春、早尾貴紀編、野村真理、鶴見太郎他、人文書院、『シオニズムの解剖 現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克』2011 年、354 頁 (121~142 頁、188~211 頁)
- ④ Romanova, Viktoria, Takao Chizuko 他 Издательство ДВГГУ, Проблемы межэтнического взаимодействия на Дальнем востоке России: история и современность, 2011 年、320 頁 (97~104 頁)
- ⑤ 中嶋毅、和田春樹他、岩波書店『東北アジア近現代通史 4』2011 年、384 頁 (124-142 頁)。
- ⑥ ウルフ・デイビッド、山室信一他、岩波書店『東アジア近現代通史 2』2010 年、369 頁 (69-92 頁)。
- ⑦ 中嶋毅、長縄光男、清水俊行他、成文社『異郷に生きる V—来日ロシア人の足跡』2010 年、354 頁 (123-139 頁)。
- ⑧ 富田武、岩波書店『戦間期の日ソ関係』2010 年、432 頁。
- ⑨ Takao Chizuko, Akao Mitsuharu, Takagi Hisao, Kotlerman, Boris, 他 Peter Lang, Frankfurt am Main, Mizrek: Jewish Studies in the Far East, 2009 年、282 頁 (42

～63頁)

⑩小森宏美、三元社、『エストニアの政治と歴史認識』2009年、235頁。

[その他]

ホームページ等

<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/e-judaica/>

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

高尾 千津子 (Takao Chizuko)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：00247264

### (2)研究分担者

原 暉之 (Hara Teruyuki)

北海道大学・名誉教授

研究者番号：90086231

ウルフ・デイビッド (Wolff David)

北海道大学・スラブ研究センター・教授

研究者番号：60435948

野村 真理 (Nomura Mari)

金沢大学・経済学経営学系・教授

研究者番号：20164741

中嶋 毅 (Nakashima Takeshi)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：70241495

小森 宏美 (Komori Hiromi)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授

研究者番号：50353454

赤尾 光春 (Akao Mitsuharu)

大阪大学・人間科学研究科・特任助教

研究者番号：90411694

### (3)連携研究者

富田武 (Tomita Takeshi) (2009～2010年度)

成蹊大学・法学部・教授

研究者番号：10207607

研究協力者

鶴見 太郎 (Tsurumi Taro)

日本学術振興会特別研究員 PD (立教大学)

宮澤正典 (Miyazawa Masanori)

同志社女子大学名誉教授